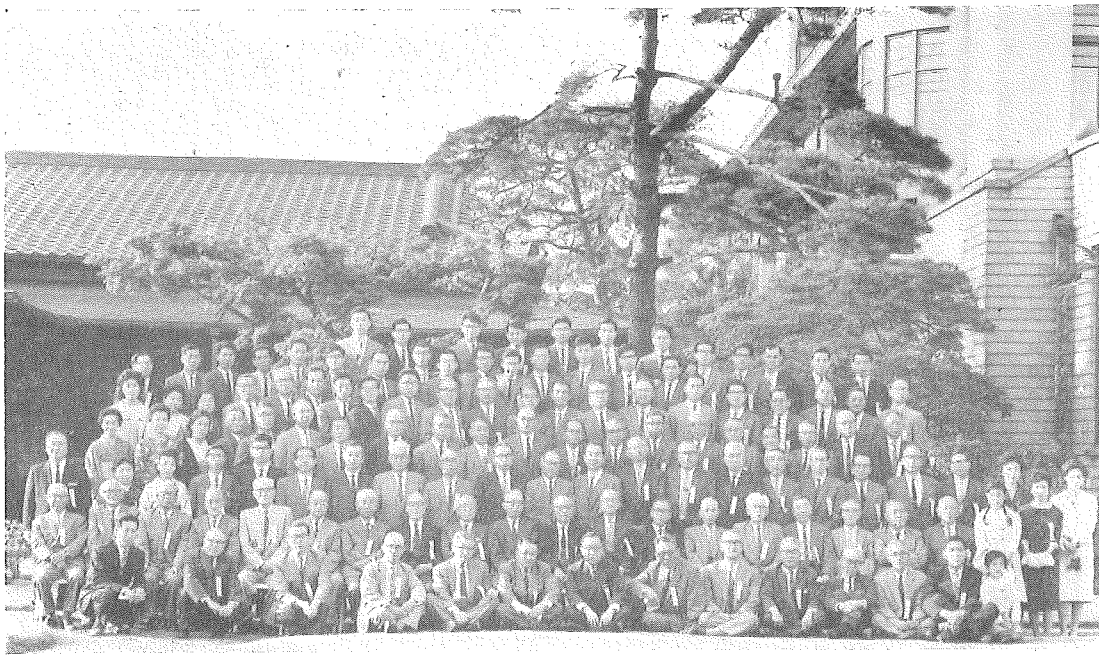


# 洛友會々報

京都市左京区吉野  
京都大学工学部  
電気工学科教室内  
洛友会



第13回洛友会総会記念写真

昭和39年5月16日 東京芝高輪光輪閣にて

## 随感

鳥養利三郎

### 人波にのまれる国宝

折角の花時にも、出かけずじまにおわった。今年に限ったことではないが、大体、私は人ごみの中へ出るのが好きではない。特に花の下に、わがもの顔に座を占めて、酒もりをしたりしているのを見るのは大きらいだから、近年は花のたよりは、もっぱら新聞とテレビでうかがうことにしている。

そういう記事の中に、今年痛快なのが一つあった。それは嵐山で、よっぱらったあぐくサクラの木をへし折ったという男を、つかまえて送検したというのである。今まではこういう取り締まりはなかったようだ。何事ぞ花見る人の長刀。

花見には少々の野暮でさえもいやがられる。いわんや一人よがりや乱暴などはもっての外である。こんな文句やことを書きならべること自体が、花の心にそむくわざであるのも万々しうちはしているが……。花見時とは限らず、このごろの人は、いつでもどこでも大変なものらしい。毎時間何回も出る車も、どれもこれも超満員であったり、展覧会でも博物館でも、歩くのがせいっぱいで、鑑賞しようなどと思うのは

初めからまちがっているという場合の方が多らしい。私は所用あつて、三月下旬に久しぶりに法隆寺詣でをした。ギョウギョウつまって身動きも出来ない満員電車でやつとたどりついたのはよいが、驚いたことには堂内がまた電車同様の押すな押すなで、歩くことさえ容易でない。何が何だか、見えもしなければ、聞えもせず、とろてん式に押し出されてしまっただけである。毎日がこういうわけでもなからうから、この日に来たのがバカだといえればそれまでだが、それにしても、あまりにも人の集まりの多いのと、またあまりにも世間知らずの自分自身にあいそがってきた。

昨年であったか、正倉院の御物拝観の時も、これと同じようなありさまであった。最近のインド美術展でも、人の頭ごし肩ごしに、やつと片りんだけをうかがうにすぎなかった。一体、人口の割りに文化施設が足りないというのか、あるいはまた人の側のお金と暇に、ゆとりがありすぎるというのか、とにかくどこかバランスのはずれたところがあるようだ。集まる人の多いほどよいにはちがいないが、その集まりかたが木筋からはずれてはいないだろうか。

国内だけでこうしている間は、それでもまだよい。そのうちに自由化の世の中だからというので、やれハワイだ、ホンコンだと、足をのぼすことになって、外国でお金を落とすてくる者がわれ勝ちにとふえて来ると、大変なことになるであろう。そういう心配はもうすで見えているようだ。

さて、法隆寺で感じたことであるが、あのような文化財を守るのに、果して国民を安心させるだけの充分な手段が取られつつあるであろうか。入場料目あての無制限入場認可、境内にあまりにも多数の、しかも如何かと思われるような営利施設の乱立などは、一たびあやまれば取りかえしのつかぬ事態を引き起こす恐れなしとしかかろう。何とか考えでもらいたい気持ちがある。

すべて物事には、量と質との両面があるろう。私は、大学でも規模があまり大きくなりすぎると、質が下がるとの恐れがあると考えて来た。観光にしても同じことがいえるのではなからうか。もうけ本位で、むやみに人数ばかり多く入れすぎると、その本質を失うだけでなく、へたをすると元も子もなくしてしまはせぬか。

東西・南北

終戦この方二十年近い間というもの、極端にいわば世界は東西冷戦の場以外の何物でもなかったといえよう。どの国も自分独自の行動というよりは、東についていこうか、西に従おうか、いづれを取るべきかに浮き身をやつして来たのである。日

本などはけわしい東西の谷間に落ちこんで、四苦八苦のうちに苦しみ通して来たことを、よもや忘れはすまい。一、二年前までは、神聖なるべき「平和」という言葉にまで東西両陣営がちがった意味の解釈を与え、そのため平和維持の方法手段が、すっかりあべこべになるといふようにはなはだしい食いちがいが起つて、ついで行こうにも並み大抵ではなかったのである。

最近はこのことは幾分下火になつて、いわば東西関係はますます平穩に帰しつつあるといえそうになつて来た。ところがそれにかわつて南北問題というのが新たに頭をもたげて来たようである。この南北問題はそれ自体が相当むずかしいものである上に、その背後にはやはり東西関係がからみ合つてくるから、なかなか厄介な課題になつてきそうである。

南北問題とは、先進国と後進国との関係、別の言葉でいえば高開発国対低開発国の関係をさすのである。いうまでもないが、今の世界では先進国と後進国との間に存在する、知約ならびに経済レベルの開きが大きすぎる。しかもこの開きは現状のままにして置くと、日一日と急速にますます増大して行く。そして後進国側は人口において世界総人口の三分の二の多さを占めているから、この開きとその増大ともたらす国際緊張は、世界平和への最大の障害となる。して見ると世界を平和に保つには、先進国はその協同責任において、この開きを除去することに努めなければならない。先進国は、後

進国の教育の推進、科学技術の向上発展のために、義務として指導援助すべきであるというのが、国連が採択した世界平和への大方針なのである。

東西問題のさ中では日本は小さくなって見れば、とにかく先進国で、特に教育の普及と科学の発展では、いささか自信もあることだから、今こそ独自の立ち場で堂々と後進国に向かつて援助の手をさし、それによつて世界の平和に寄与する決意を固めるべき期が到来したといえよう。

どの国を、どんな風に指導するか、具体的な問題はしばらくおくと、まず一般的なことをいうならば、われわれ自身が今日までに得たところを百年の経験に基づいて功罪ともに率直に伝授すること、重点を置くべきではなからうか。また指導力の強い一流学者を長期滞留させて、じっくり懇切指導に当たらせるべきではなからうか。

明治初期に日本が外国から招いた学者指導者がいづれも一流の人物であつたこと、またそれらの多くが長期に留めてくれたことが、日本の科学技術を今日のように発展させた一つの要因になつてゐることを忘れてはなるまい。

さて仮にこのような方針をもつて、日本が対外科学援助に向かう決心を固めたとしたら日本の社会環境は果たしてこれをやらせるようになってゐるであろうか。ひひっかかするのは公務員法ではあるまいか。五

年六年はおろか、時と次第によつては十年二十年と、その国に残らなければ効果はあるが、今の制度ではそういうことはできない。外にも改めてかからなければならぬ点多々ある。

閑人忘語

ラウフトレップ

大一一 樋口貞三

独乙語にラウフトレップというのがある。実によく出来ている。トレップがラウフエンスである。エスカレーターという様な外国語を用いる必要がない。

やたらに漢語を使ったがった時代、何が何でも英語の時代、メートルといふサンチといふのはよいが結構日本語で通じる言葉を英語でやりたがる。

何が米式の頭文字の行列である。何の事か新語研究家でないに判らない様な言葉がいやに流行する。というのが我々のお困柄である。

ゲルマン民族が科学発展の歴史を持ち、米ソの学術中心をなしているのを省察すれば、原因はラウフトレップにある。エスカレーターという外国語を覚える手間のいらぬ幸いを持つてゐる。算盤はレップンプレットであり、

従うはナツハゲーヘンである。何でも自国語の組合せで行くから子供でもよく判る。

衛生思想が家庭に普及してゐる事、物の考え方が合理的である事、等々すべては言葉の組合せで表現出来るという根本的な概念に起因してゐるのではなからうか。

講義の用語がすべて英語であるのでテニオハだけ英語にする結構英語のノートが出来る。ついでに試験の答案を英文で書いたら落第点をつけられた。それも相手が悪かつたのかも知れない。漢文の大家新城先生であつたから。もっとも内容においての自信もさらさらなかつたのだ。

日本の学問も大分進んだ筈だ。国語国文で講義が聞ける日は何時来るのやら。

こんな事を書いて本屋をのぞいて見たら、阪大教授熊谷三郎君著「電子工学ハンドブック」が全く横文字なして出来ていたので我意を得たりと思つた。

会費振込みについて

昭和三十九年度会費は、本会報に振替用紙を同封して請求いたしましたから、お忘れなく、すぐお払込み下さい。

なお、昭和三十八年度およびそれ以前の会費未納の方には合算して振替用紙を同封して請求いたしましたから、これまたお忘れなく、すぐにお払込み下さい。

第十三回洛友会総会の記

五月十六日(土)午後三時より東京芝高輪光輪園において第十三回洛友会総会が五月晴れの好天気に恵まれていとも盛大に催された。

乙葉幹事司会の下に、副会長佐藤穂徳氏議長席に着き、鳥養会長が本大会に出席のため懇々上京されたのであるが、敬慕のため御欠席になつたので議長をつとめるが、先生の玩味ある訓話に接するの機を得ないので遺憾に思う意の挨拶の後、昭和三十八年度收支決算並びに昭和三十九年度收支予算を付議し、山村幹事の説明があつて、これを会議に諮り、満場拍手裡に承認可決せられた。

ついで、役員改選の件については、議長指令による詮衡委員五名により詮衡せよとの動議が成立し、議長は大西冬蔵、高見祥平、高島正一、伊藤忠雄、石堂園雄の五氏を指名した。

大西委員長より慎重審議の結果、会長鳥養利三郎、副会長佐藤穂徳、芦原義重および林重憲の各氏は重任とし、新たに山村忠行氏を副会長に推薦することに決したと報告し、議長はこれを会議に諮り、満場の拍手裡に可決した。

これによつて議事を終り、庭園の周囲にしつらえた模擬店に、天ぷら、焼鳥、にぎり寿司、おでん、しるこ等に舌鼓をならし、お互に健康を祝しつつ歓談の時を移した。宴酣にして西川舞踊団の民謡踊とブラスバンドは一段の興をそえた。やがて薄暗くなる頃に散会した。

出席者

- 岩谷 英一 太田 英雄 田中 信義 田中 哲郎 松尾 三郎 正木 知巳 平田 稔 中山 健一 喜田村 善一 五十嵐 正男 浅井 光枝 吉岡 俊雄 石堂 罔雄 田中 裕 伊藤 忠雄 白井 好巳 林重 憲 広瀬 一夫 岩本 義昌 小宮 義和 沢山 義一 滝本 浩 岡本 一郎 樋口 竹太郎 高島 正一 菊地 保夫 小森 修二 小沢 仙吉 神保 成吉 阿部 忠清 山村 忠行 小柳 尚治 真崎 尚忠 宮崎 駒吉 床次 真吉 寺村 富次 宝来 勇四郎
- 木村 小寛 天野 敏也 平野 一男 相木 勲 高崎 達弥 石崎 弘正 岩本 弘正 古池 日出雄 香山 安三 西山 正也 高原 登兵 松井 卓夫 足立 悌次 石垣 悌一 平野 憲清 久野 清 浜崎 文平 大島 文平 平出 三郎 山本 三郎 石川 辰雄 俣野 麻太郎 富永 和郎 西原 藤吉 巽良 知 高田 太三郎 福島 秀次郎 山口 信助 高見 祥次郎 楠本 宗次郎 乙葉 真一 大西 冬蔵 大塚 徳雄 長島 正隆 古田 正康 佐藤 正徳 大森 穂徳 丙

昭和38年度收支決算

昭和39年度收支予算

収入の部 昭和38年4月1日より  
昭和39年3月31日まで

収入の部 昭和39年4月1日より  
昭和40年3月31日まで

科 目	決 算 額	予 算 額
会 費	1,100,600	980,000
本年度分	742,700	780,000
過年度分	357,900	200,000
電気講習所会費	162,500	150,000
預 金 利 子	101,192	60,000
雑 收 入	808,000	600,000
繰 越 金	2,268,995	2,268,995
合 計	4,441,287	4,058,995

科 目	予 算 額	前年度決算額
会 費	1,100,000	1,100,600
本年度分	800,000	742,700
過年度分	300,000	357,900
電気講習所会費	150,000	162,500
預 金 利 子	110,000	101,192
雑 收 入	10,000	808,000
繰 越 金	2,902,578	2,268,995
合 計	4,272,579	4,441,287

支出の部

支出の部

科 目	決 算 額	予 算 額
刊 行 物 費	947,775	900,000
名簿編集費	33,850	20,000
同 印刷費	510,000	500,000
同 発送費	202,585	180,000
会報編集費	18,860	20,000
同 印刷費	61,000	60,000
同 発送費	121,480	120,000
諸 費	550,934	525,000
備 品 費	12,500	10,000
通 信 費	7,505	5,000
会 合 費	20,422	15,000
総 会 費	199,812	200,000
集 金 費	87,695	75,000
総 掛 費	96,000	100,000
旅 費	127,000	120,000
臨 時 費	40,000	40,000
懇話会補助	40,000	40,000
予 備 費	2,902,578	2,593,995
繰 越 金	2,902,578	2,593,995
合 計	4,441,287	4,058,995

科 目	予 算 額	前年度決算額
刊 行 物 費	980,000	947,775
名簿編集費	30,000	33,850
同 印刷費	450,000	510,000
同 発送費	200,000	202,585
会報編集費	15,000	18,860
同 印刷費	62,000	61,000
同 発送費	123,000	121,480
諸 費	500,000	550,934
備 品 費	15,000	12,500
通 信 費	5,000	7,505
会 合 費	20,000	20,422
総 会 費	120,000	199,812
集 金 費	90,000	87,695
総 掛 費	100,000	96,000
旅 費	150,000	127,000
臨 時 費	40,000	40,000
懇話会補助	40,000	40,000
予 備 費	2,852,578	2,902,578
繰 越 金	2,852,578	2,902,578
合 計	4,272,578	4,441,287

預金および現金

昭和39年3月31日現在

信 託 預 金	1,518,525	三菱信託銀行, 住友信託銀行各京都支店
定 期 預 金	1,000,000	第一銀行百万遍支店, 住友銀行京都支店
普 通 預 金	375,730	同 上, 同 上
当 座 預 金	2,934	第一銀行百万遍支店
振 替 残 金	750	
現 金	4,630	
合 計	2,902,578	

大島羽幸太郎 広田 方孝  
清水 照久 大畑 昭一  
武藤 良介 白杉 茂  
宮内 志人 梶井 信一  
金森 剛明 礪 博史  
多田 智彦 大井田 清  
萩野 正規 深尾 忠一郎  
荻田 正雄 中田 良知  
脇坂 隆夫

新卒業生(大学院)  
雨宮 宏 園田 嘉文  
成久 洋之 (学部)  
井上 雅義 上田 勝久  
川上 寛児 篠原 進  
根矢 一三 藤本 隆  
本田 忠宏 胡間 圭三  
芦田 俊夫 天野 正紀  
池内 義則 高木 浩一  
ヘン・フ・チョン

電気講習所  
浅賀 春一 井上 弥三郎  
中村 秀治 吉田 寛一  
田中 要 中野 壮二

洛友会東京支部総会記事

本支部総会は五月十六日(土)光輪閣において本部総会に先だつて午後四時より開催した。

石川支部長の挨拶に引続き、太田幹事より昭和三十八年度行事並に決算報告を行なった後、昭和三十九年度行事予定並に予算の説明を行ない満場一致で承認可決せられた。

ついで、本部総会の後に、石川支部長より本年度本支部へ入会の新卒会員三十四名中当日出席の十六名の紹介が行なわれた。他は勤務の都合等で出席されなかつたのは残念であつた。(太田記)

洛友会九州支部総会記事

昭和三十九年度九州支部総会は四月十日午後五時半より福岡市の天神ビルにおいて、教室より林(重)先生、本部より山村幹事をお迎えして開催された。

会は宮田支部長外約二十名が各地より参加して、昭和三十八年度決算承認、役員選出が行なわれた後、林先生より教室の近況報告、山村幹事より名簿作成状況、他支部の状況等が報告された後、座談に入り会員の近況報告や日頃自慢の隠芸等も披露され、盛会のうちに八時すぎ散会した。(井上記)

出席者

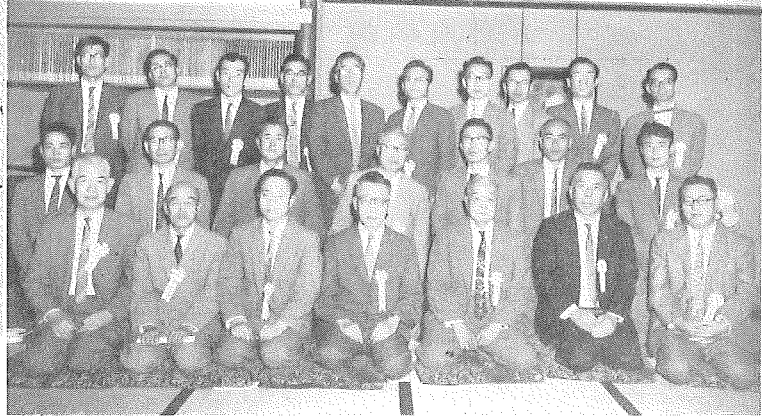
林(重)教授 山村 幹事  
高柳 与四郎 小柳 助治  
万田 元房 宮田 秀介  
岡 次雄 河本 勝寿  
戸山 信芳 加来 誠一郎  
西村 利夫 小菅 佐七郎  
甲斐 靖造 古城戸 正隆  
増岡 健一 大塚 成吉  
深町 藤吉 佐藤 文紀  
勝木 将文 藤江 恂治

洛友会四国支部総会記事

六月六日(土)午後五時より教室から林(千)および木嶋教授、本部より山村幹事をお迎えして、高松市内紅羽旅館で第九回洛友会四国支部を開催した。

平井幹事司会のもとに、宮地副支部長の挨拶、会員の近況の紹介があつて、昭和三十八年度会計報告および昭和三十九年度予算案を満場一致で承認した。

次いで林教授の教壇(近況、山村



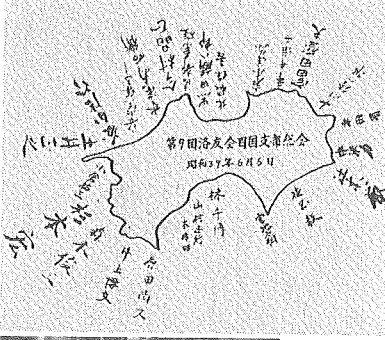
展する姿を目のあたりにして話題はつきず、その間、藤本氏の玄人顔負けのかくし芸が披露され、先生方の合唱など次々に指名されて、日頃のど自慢(?)が競われるなど終始なごやかな雰囲気の中に時を過ごした。(平井記)

信友会例会開催記事

今度、間崎竜夫君が京都へ帰られたのを機に、六月十九日久しぶりに例会を応用科学研究所にて開催した。丁度、乙葉貞一君が京都へ来るというので待っていたが、突然腰痛のために列席出来なかつたことは残念であつた。

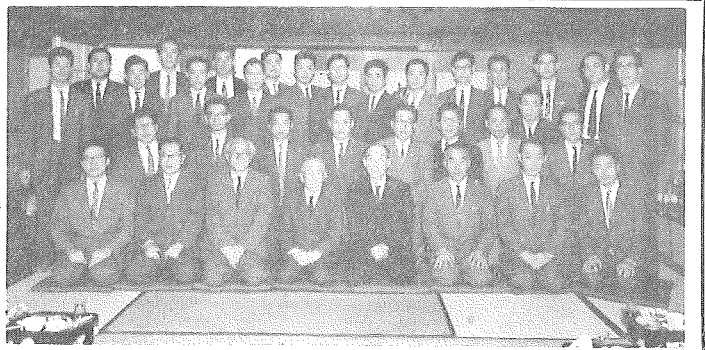
写真前列左より、山村忠行、間崎竜夫、上林一雄、辻忠夫

後列左より、光野重威、阿部清、松田長三郎、宮崎在加枝、保寿康象、大塚徳雄



幹事の本部の状況報告があつて総会を終了した。

引続き懇親会に入ったが、井上氏撮影による教室のカラー・スライドに往時をなつかしみ、また母校の発



昭和二十九年卒業生 十周年記念クラス会

新緑香る五月三日の夕べ、我等昭和二十九年卒業生は松田、阿部、林(重)、前田、田中、池上、坂井の諾先生方の御出席を賜り、洛北高野川畔の大和において卒業生十周年のクラス会を開催した。

集つたもの二十七名、東京から山村君、四国から井上君が遠路かけつけた。中には十年ぶりの再会で名前と顔が一致しないものもあり、簡単な自己紹介などを行った後、談笑裡に旧支を暖めた。みんな口は達者になつたが歌もおどろも出ず無芸大食の徒であつた。

次のクラス会開催を約して盛会のうち散会した。(屋野、岩井、立山)